

「何度でも」

ダニエル書 10 : 20 – 11 : 1

February.21.2021

ダニエル 10 : 20 – 11 : 1 (パワポ)

Preface

今お読みした聖書箇所を、ここ 1 週間ずっと思い巡らしていました。

すると、一つの言葉が思い浮かんできました。

それは、今日の説教題の「何度でも」という言葉です。

ダニエルに現れた天使ガブリエルは、何度でもあなたのために戦うし、何度でもあなたのために祈りの応答を携えてやって来るし、何度でも神から託された御言葉の解釈を伝えるし、そして、何度でも倒れたら励まし、力づけるからと言っているように、思えました。

先週まで見てきましたように、今、ダニエルは、悲痛の祈りを捧げています。

70 年ぶりに故郷エルサレムに帰還したはいいいものの、執拗な妨害工作に苦しんでいるイスラエルの同胞の民たちのために 21 日間の断食祈祷を行っていたところ、天使ガブリエルが現れて、問題の根本である悪霊どもとの霊的戦いを制するために来たと告げてくれました。

即ち、背後で、ペルシア王国の権力者たちやサマリア人たちを扇動して、執拗な妨害工作を企ててきたペルシアの国の君と名乗るサタンや悪霊どもと戦い勝利して、エルサレムの神殿建築を完成へと導くと言うのです。

そしてついに、先週エズラ書で見ましたように、実に 16 年間という長い時間を要しはしたものの、神の御旨に適う神殿を建築するに至りました。

ただここで、ハッピーエンドでしたと話が終わるのではなく、続きがあります。

Part One

ダニエル 10 : 20 (パワポ)

今ここで、ガブリエルは、ペルシアの国の君と戦うために出て行って、このペルシアの君をやっつけるけれども、それで終わりではなく、今度は、ギリシアの君と言うギリシア帝国の権力や支配や欲望等々を背後でコントロールする悪霊どもがやって来て、また悪さをするからと、告げます。

ペルシアの時代にはペルシアの君という悪霊が、ギリシアの時代にはギリシ

アの君という悪霊が、背後で働いているからと告げるんです。

以前もお話したと思いますが、C.S.Lewis の書いた「悪魔の手紙」という本があるのですが、この本は、悪魔の上司が悪魔の部下に手紙を書き送っているという設定で書かれた本なんです。

で、その中にこんな内容があります。

「人間どもに、神なんて存在はいないんだと思わせるだけでは不十分だから、我々悪魔の存在も幻じみたもので、存在しないんだと思わせなさい。」という、悪魔の上司から部下に宛てたアドバイスです。

面白いですね。

私たち人間に、「神のみならず、悪魔なんて言う存在も、空想の話でしかないようにと思わせなさい」と言うんです。

で、この内容を、ダニエル書に出てくる天使ガブリエルは、真っ向から否定します。

歴史において、悪と思われるすべてのものの背後で、操り、操作している悪魔という存在が、確かに存在して活動しているんだと教えます。

しかも、それはいつも同じ輩ではなく、役割が分けられているとまで告げるのです。

主イエス様の再臨と共に、新しい天と新しい地という神の国が到来するまでは、ありとあらゆる悪が、姿を変え、形を変え、何とかの君と名乗る悪霊に誘われながら、ひっきりなしに登場してきます。

イエス様も新約聖書の中で、私達の心を惹きつけるような国、人、物、思想、価値観、ものさし、社会構造が次から次へと登場し、ありとあらゆる救世主もどきが、しるしや不思議をもって、クリスチャンを含めたすべての人々を惑わし、すべてが終わる終末の時まで、そのまやかしや欺瞞がずっと続くと、おっしゃいました。

そして今ここで、ガブリエルもそのことを言うわけです。

中東世界を牛耳るペルシアという大国が滅びて、はい終わりではなく、今度は、ギリシアという救世主もどきの国、人、物、思想、価値観、ものさし、社会構造を用いて、ギリシアの君と名乗る悪霊どもが悪さを働き、人々を惑わすだけでなく、神の民をも惑わし、神の信仰共同体を蹴散らし、苦しめるけれども、

なお、御使いたちが、戦いに出て行くというのです。

ダニエル 10 : 21 - 11 : 1 (パワポ)

ガブリエルのみならず、天使の長であるミカエルまで合流して、多種多様な君と名乗る悪霊どもと戦ってきたし、戦っているし、戦うから、恐れず、安心し、強くありなさいと言うわけです。

つまり、ガブリエルは、「何度でも」、来るし、与えるし、起こすし、力づけるからと言っているんです。

Part Two

実際、ダニエル書の中で、この10章に至るまで、天使ガブリエルは、少なくともダニエルに目に見える形で3度現われています。

そして、ダニエルの前に現れるたびに、祈りの応答と御言葉の解釈を与え、励まし、力づけ、起こしてくれました。

で、このダニエル書10章では、ダニエルに与え、力づけるだけでなく、ダニエルのために、そして苦境に陥っているイスラエルの民たちのために、実際に戦いに出て行きました。

「何度でも」与えるし、「何度でも」戦うし、「何度でも」助けると宣言してくれています。

これを「何度でもの恵み」と名付けたいと思います。

何度でもの恵み。

聖書は、始めから終わりまで、この“何度でもの恵み”に包まれています。

何度躓いても、何度裏切っても、何度傷つけても、何度傷ついても、何度背教しても、何度神様を捨てても、何度イエス様をのことを知らんぷりしても、

何度でも赦し、何度でも癒し、何度でも抱擁し、何度でも与え、何度でも導いてくださる神の恵みに包まれているのが、聖書であり、人類の歴史であり、教会の歴史であり、私たちクリスチャンの歴史です。

この“何度でもの恵み”が無ければ、私達は今、この礼拝を献げる場にいることも出来なければ、今ここに存在することさえも出来ない存在です。

私達は、私達の力で自ら存在していると錯覚しがちですが、私達は、神の“何度でもの恵み” ゆえに、私達人間は存在することが出来ています。

聖書は、「この神の与える何でもの恵みに気付き、知り、信じ、降伏し、受け入れ、そして、神を褒めたたえる者となりなさい」と、始めから最後まで、一貫して語り続けます。

しかし、その神の語る言葉に一貫して拒み続ける人の姿ゆえに、残忍で、無慈悲で、冷徹で、狡猾で、戦いがあり、殺人があり、差別があり、格差があり、不平等があり、目も覆いたくなるような出来事が、聖書には記録されているんです。

「何でこんな残虐で、ふしだらなことが聖書に記録されているのか？」と、あたかも他人事のように、聖書を読んだことのある人ならば、誰でも一度は思いますが、聖書に書かれていることは他人事ではなく、私事なんです。

私（たち）という人こそ、残忍で、無慈悲で、冷徹で、狡猾で、戦い、殺し、差別し、優劣をつけ、目も覆いたくなるような悪と罪が内在しているんです。

それでも、神様は、何度でも恵みを施し続け、何度でも忍耐し続け、何度でも赦し、何度でも立ち返る機会を与え、ついには、この何度でもの恵みが、ご自身を死に渡すという究極の恵みとして、主イエス様の十字架の死と復活に現れるのです。

Part Three

この何度でもの恵みに与った人が、聖書にはたくさん登場してきますが、その中でも最も有名で、最も分かりやすい人物のうちの1人が、12弟子の長であったペテロだと思います。

ペテロは、イエス様のことを「あなたは生ける神の子、キリストです」と告白しながら、その直後には、自分の社会的地位が危ぶまれると思い、イエス様が十字架に架かれることを否定してしまいます。

そして、「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わず、人のことを思っている」と、イエス様に叱られてしまうんです。

それでも、ペテロは赦され、愛され、最後まで主イエス様の弟子としての生涯を全うすることが出来ました。

また、ペテロと言いますと、誰もが思いつく出来事があります。

それは、イエス様のことを「あんな奴、知らん！」と、3度否定した事件です。

マタイの福音書 26 : 67 - 75 (パウポ)

顔に唾をかけられ、拳で殴られ、平手で打たれているイエス様のことを知らんと、ペテロは3度否定しました。

その結果、イエス様に唾をかけ、拳で殴り、平手で打ったのが、他の誰でもない、正に自分であるということを露呈してしまいました。

「あなたは生ける神の子、キリストです。」と、どんなに口で言ったところで、3年間も衣食住を共にしたイエス様を裏切り、見捨てることしか出来ない、残忍で、無慈悲で、冷徹で、狡猾な自分自身を、自他共に認めざるを得なくなりました。

そして、激しく泣きました。

彼の涙は、私達の涙でもあります。

十字架に架けられ死に、復活したイエス様は、再びこのペテロに現れて、「あなたはわたしを愛しますか。あなたはわたしを愛しますか。あなたはわたしを愛しますか。」と3度聞きますが、これはイエス様がペテロを責めるためではありません。

むしろ、傷ついているペテロに、「大丈夫だから。わたしはあなたの気持ちを分かっているし、あなたを愛しているから、心配しなさんな。」と、慰めている言葉なんです。

と言うのも、「あなたはわたしを愛しているか」とペテロに3度お聞きになった後に、「あなたは、わたしの愛する羊を飼いなさい。」と、これまた3度語り掛けてくださるんです。(ヨハネ21章)

ご自分の命に代えるほどに愛した羊のような人々を、ペテロに任せたいとおっしゃるんです。

それでもやっぱり、また、ペテロを信頼し、恵みを施してくださるんです。

つまり、イエス様が、ペテロが3度裏切ることを事前に知っており、それをペテロに伝えたのは、「ほら、見たことか!」と責め立てるためではなく、

ペテロが、必要以上に自分のことを責め、傷つけ、立ち直れなくなるようなことがないようにとの、配慮ゆえの言葉だったんです。

「わたしは、あなたが裏切ることをも含めて、あなたを愛しているし、赦しているから、心から安心して立ち直りなさい。」という、十字架に架かったら一緒に居てあげることが出来ないゆえの温かい配慮の言葉だったんです。

Part Four

ペテロは、ここで、イエス様の“何度でもの恵み”を、骨身に染みるほどに体験しました。

私達も、この“何度でもの恵み”を、骨身に染みるほどに体験してきましたし、これからも体験し続けて行くでしょう。

そして、この“何度でもの恵み”こそ、神の愛です。

ペテロがある時、イエス様に、「兄弟が、私に対して罪を犯した場合、何回まで赦すべきでしょうか？ 7回まででしょうか。」と訊いたところ、
イエス様は、「7回を70倍するまでです。」とお答えになりました。

つまり、ペテロは、「僕なら7回まで赦せる度量と覚悟がありますから、僕のことを褒めてもらえませんか？」と他の弟子たちの目気にしながら、ちょっと威張って言いますが、

イエス様は「そんな度量と覚悟もあなたにないことは分かっているけれども、わたしはあなたを愛している。

だから、あなたも、兄弟を、隣人を、果てしなく赦してあげなさい。赦すことに限りはありません。あなたに期待していますよ。」と、答えてくださったわけです。

先ほど、「私達は、この何度でもの恵みがなければ、この礼拝の場にいることも出来なければ、今ここに存在することさえも出来ない存在だ」と言いましたが、私自身、このことが、ここ最近、やけに身に染みんでいます。

何を通して見に染みたのかと言いますと、家族や家庭を通してです。

家族と一緒に暮らしていれば誰も痛烈な兄弟喧嘩や夫婦喧嘩を体験するでしょうし、親が子供を必要以上に叱ってしまうこともあれば、子が親を見下げることもあるでしょう。

また、子供が親を裏切ることもあれば、親が子供を裏切ることもあります。

私自身、これらのことをしている正に張本人ですが、

でも、何度でも赦してもらったし、何度でも抱擁してくれたし、何度でも一緒に食事をしてくれたし、何度でもまた再び笑いかけてくれたし、何度でも味方になってくれたし、何度でも痛みを共にしてくれたし、“何度でもの恵み”を何度も施されて、生かされているということを、しみじみ気付かされました。

そうして、改めて聖書を見ますと、家族を題材にした話が散りばめられているということに気がきます。

聖書は、夫と妻をキリストと教会に例え、神と人の関係を父と子と表現し、放蕩の息子の例え話があり、父母を敬うことを十戒に入れ、

一般的に誰にとっても最も近い隣人である家族に、“何度でもの恵み”を施

すことをもって、愛するということを教えているんです。

Conclusion

そして、ダニエル書に記録されている天使と悪魔の戦いの話は、私たちの日々の生活から遠く離れた訳の分からない話ではなく、

最も近くの人から“何度でもの恵み”を施され、最も近くの人に“何度でもの恵み”を施す話なんです。

つまり、天使と悪魔の戦いは、私たちの実生活において、“何度でもの恵み”を施し、施されるという形で表れる実話であり、霊的戦いです。

主なる神様は、天地創造の初めから今の今に至るまで、ずっと一貫して、“何度でもの恵み”を体現して来られました。

そして、その最たる恵みがイエス様です。

私達のために死ねないとは思わず、神であられることを捨てられないとも思わず、裏切り者は滅びてしまえなんても思わず、ご自身を犠牲にして、私達を救ってくださいました。

永遠のいのちを施してくださいました。

神の子となり、本来あるべき人間らしさを回復させてくださいました。

そして、これらの恵みを覚えるために、聖餐式を定めてくださいました。

この後、聖餐式が執り行われますが、

聖餐式は、主イエス様の“何度でもの恵み”を新たに覚える時であり、覚えるために何度でも、主イエス様が再び来られるその日まで、守り続ける神の定めし愛の儀式です。

今日のこの後の聖餐を受けることを通して、三位一体なる神様の“何度でもの恵み”を心に刻みましょう。

お祈りいたします。

祝祷：マタイの福音書 18：22